

事業報告書（令和7年度）

事業名

LGBT(かもしれない人を含む)の子どもの孤立・不安の解消のためのネットワークづくり

団体名 一般社団法人にじふ

担当者名 野崎 晴貴

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、講師、参加対象者、人数、内容等）

下記の通り5回実施した。

内容はいずれも以下。

- ・LGBT(かもしれない人を含む)ユースの現在【情報提供】
 - ・参加者のみなさんの活動内容やユースとの関わり方に関する紹介
 - ・LGBTを含む多様なユースとの関わりに関する意見交換や情報共有

回	日時	会場	参加者
第1回	9月22日(月) 14時～16時	ハッシュタグ岡山	3名 美咲美佐子/NPO法人岡山市子どもセンター代表理事 東りえ/NPO法人子どもシェルターモモ理事、NPO法人玉野SDGsみらいづくりセンター理事長 青木詠里子/おかやま地域若者サポートステーション
			
ユースの現状(希死念慮等の調査結果)について、想像よりも過酷な状況にいることについての気づき、またそうした子どもたちが就職するにあたっての困難さやその対応をする際に気をつけたい点などについて意見交換を行った。			
第2回	10月20日(月) 10時～12時	ハッシュタグ岡山	6名 久保田将裕・藤田早苗/おかやまプレーパークプレーリーダー 田中裕希・西村純代/NPO法人岡山市子どもセンター理事 中平徹也/環境カウンセラー 矢守裕貴/精華学園高等学校岡山校キャリアカウンセラー
			
ユースとの関わりについての説明スライドに具体的なノウハウ提供を追加したことで満足度が高まったように感じられた。プレーパークで行われるベーゴマの負け方に『おかま』と呼ばれているものがあり、今まで何気なく使っていたが差別用語だと気づいたため、今後使わないように子どもと話し合いたいという具体的な気付きがあげられた。保護者が当事者の子どもを受容することの複雑さ、深刻さ等に関する意見交換も行った。なお、プレーパークに関して、後日今回の研修内容を踏まえた講座の実施につながったと聞いている。			
第3回	10月20日(月) 14時～16時	ハッシュタグ岡山	3名 白幡めぐみ/まなびば ippo 松尾真治・八百裕美/倉敷市教育委員会 人権教育推進室
			

	倉敷市教育委員から保護者向けのLGBTに関するパンフレットの情報提供があり、新たな発見になった。通信制高校や学び直しの現場の体感として、複合的課題をもつ方の就労の難しさ、できる限り状況が悪化しないための居場所の大切さなどに関する言及もあった。		
第4回	11月10日(月) 14時~16時	NPO 法人山村エンタープライズ	1名 能登大次/NPO 法人山村エンタープライズ 代表理事・事務局長 ※津山市内の会場での開催を予定していたが、参加申込状況を鑑み、現地訪問に切り替えて実施した。
			
	引きこもりなど生きづらさを抱える若者が社会的自立を目指す「人おこしシェアハウス」の見学もさせていただいた。希死念慮等の状況に関しては、LGBTも引きこもりも同様の傾向にあること、自分自身のもつ力を出していくことが大切、などにじーずと共通する部分も多かった。共同生活の場であるからこそその性別分けの難しさや、その打破に関する意見交換なども行った。		
第5回	12月15日(月) 14時~16時	マービーふれあいセンター	3名 葉山朝子・荒武悠佳/岡山県精神保健福祉センター 秋山由美子/ガールスカウト岡山県連盟
			
	ガールスカウトに当事者はいないという空気感について共有され、今後の講演なども想定されるようなつながりが生まれた。岡山県精神保健福祉センターは、LGBT当事者が複合的困難や引きこもり状態に陥った際などに相談できる場となり得る。そうした専門性をもつ組織との関わりを生むことができた。また、後日、来年度センターが関係している不登校支援に関する取組への参画について打診があったほか、県内保健所への当団体の取組の周知について具体的な窓口の紹介をいただいた。		
追加1	12月16日(火) 11時~12時	岡山県庁	2名 高森英郎・小西久美子 岡山県教育庁 人権教育・生徒指導課
			第3回に参加した倉敷市教育委員会からの紹介もあって、岡山市を除く、岡山県内公立学校のスクールソーシャルワーカー(SSW)の担当部署に訪問した。人員配置や保護者との関わり方などについて新たな知見が得られた。今後、SSWへの研修の機会にチラシ配布や情報の紹介などを実施できる可能性を見出すことができた。
追加2	1月20日(火) 16時~18時	くらしき地域若者サポートステーション	渡辺好美/くらしき地域若者サポートステーション 蔵本美和/学習教室くらすぼ
			就労支援、居場所での学習支援の取組について現状の共有や意見交換を行った。LGBT当事者の就労への困難さについて理解が深まった。これを踏まえて、来年度の居場所事業に関する連携について打診があり、実施に向けて検討中である。
2. ESDの視点			

<p>①事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか</p>
<p>アンケート回答によると、理解度の変化について、ほとんどの方が「とても満足」と回答していた。また、今後 LGBT (かもしれない) 子どもに関わる場面で、必要なときはにじーずに相談・紹介することについても、「ぜひ紹介・相談したい」との回答が得られている。</p> <p>自由記述では、以下のような回答が得られている。</p> <ul style="list-style-type: none">・自身があまりにも不勉強なことがわかり、そのことに気が付けたのも収穫。知識を深め、理解者を増やす努力をしていきたい。そのために、講演や勉強会を企画し、是非とも講師の立場でご協力をいただきたいと思う。カミングアウトをしなくてもいい社会がいい。・今回のように、様々な立場の人が交流できる場をこれからも望んでいる。・和やかな雰囲気の中で、参加者の皆様の真剣な思いが伝わってきてとても有意義な会でした。またこのような機会があればぜひ参加させていただきたい。スクールカウンセラー向けの研修の際ににじーずのことをしっかり紹介する。・LGBT の方たちを取り巻く環境が思ったよりも進展していないことに驚かされた。・安心できる場づくりをする上で、現場での自身の姿勢や言動は気をつけないといけないと思った。また、少しでも安心できる場所、人が増えていくようなアプローチしていきたいと思った。・「自分らしく生きる」をサポートするという点において通底する志はまったく同じだとあらためて感じた。 <p>このように、子どもと日々接する現場を持っている方は自身の言動について振り返り、今後の姿勢を考える機会になっている。また、子どもと接する方に対する研修の機会をつくったりその場で伝えたいなど、この会合を機に更に輪が広がっていくことが期待できる。また、支援先や学校現場に近いところで、当法人の情報にアクセスしやすくなるような具体的な動き (チラシの配架や研修等の場における情報提供等) についても今後、展開できる可能性を見出すことができ、それぞれの立場で出来得ることを提案いただく機会になった。具体的に実現が見通せるような内容もあり、直接対面して意見交換を行うことの意義深さを改めて感じる機会になった。</p>
<p>②どのように学び合いを取り入れたか</p>
<p>にじーずの活動紹介やLGBT ユースを取り巻く現状(調査結果の紹介)の時間は半分程度にとどめたこと、少人数での開催にしたことによって、参加された方が受け身ではなく一緒に考えながら発言する場にすることができた。また、にじーずとして、これまで他団体と交流する機会が乏しかったため、県内の団体や組織の役割、それぞれの現場で感じておられることなどについて学ぶ機会になった。</p>
<p>③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか</p>
<p>にじーず岡山で独自に作成している「にじーず岡山通信」を参加者にメール添付の形でお送りしており、開催以後も継続的に情報発信をすることを通じて、研修の日だけではない関係構築と、それに基づくLGBT ユースに対する意識の醸成を試みている。後日談として本取組での意見交換を活かすことができたと聞くこともあり、各々の現場での実践について確認することができた。</p>
<p>3. 取組の成果 (事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。)</p>
<p>社会資源のひとつとしての認知を広げること (横のつながりの強化と、それに基づくリファー先になり得る関係構築) を目標として掲げていた。上記に示したとおりのアンケート回答結果が得られており、この目標については十分に達成することができたと考える。また、言動の改善や研修への取り入れなど、本事業を機に参加者それぞれの現場でのアッ</p>

アップデートにもつながったことは大きな成果といえる。詳細はプライバシーの観点から省略するが、本事業チラシを送付した施設から連絡があり、本事業への参加につながると共にユースへの居場所の紹介につながったケースもあった。

なお、参加者は当初の見込みよりやや少ない実績となったが、日程が合わずに参加できなかった方についても、本事業について個別の案内をしており、電話やメール等によるやり取りを行った。直接的に対面して話げできた方ばかりではないが、事業実施前と比べて、確実に認知の向上にはつながっており、今後の地域におけるつながりの強化に向けた足がかりをつくることができた。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

会の中で紹介した、12～34 歳の当事者を対象にした調査(※)によると、過去 1 年に、中高生の 9 割が学校で困難やハラスメントを経験、10 代の半数以上が自殺念慮(10 代全国調査の 3.3 倍)、約 20%が自殺未遂、約 40%が自傷行為(10 代全国調査の 3.6 倍)を経験したという深刻な結果がある。 ※「LGBTQ 子ども・若者調査 2025」認定 NPO 法人 Rebit

こうした状況が生じないよう、当事者のための居場所は欠かすことができない。ただし、居場所を自ら見つけ、自らの力で居場所に来ることができる当事者ばかりではない。若年であればあるほど移動できる範囲も限られている。居場所に来ることが唯一の状況改善の手段であるわけではないが、選択肢としてこうした社会資源があることをユースに知らせ、行きたいと思ったときに行くことをサポートできる環境をつくることは、地域の大人の役割のひとつであると考えている。こうしたことができる大人が多いほど、(LGBT に限らず)安心・安全に暮らしていくことができる地域になる。

本事業を機に、今後も定期的な居場所の運営と、学校関係者や NPO の方などを中心にしながら、安全・安心な地域づくりの担い手に対するアプローチを続けていきたい。